

『Journal of I-LISS Japan』執筆要綱

1. 原稿は横書きとし、完全原稿とする。
2. 使用言語は日本語または英語とし、日本語の場合は原則として常用漢字、現代仮名づかいを用いる。
3. 句読点はコンマ（,）およびマル（。）を用い、文中の引用は「 」または“ ”内に入れる。長文の引用の場合は前後を1行空け、本文より2字下げて記す。
4. 数字については、引用文および慣例的な漢数字の表現以外は、アラビア数字を用いる。
(例) 数十人, 何百年, 三人称
5. 外国人名や外国地名については、よく知られているもの以外は、初出の個所にその原綴またはローマ字表記を丸括弧に入れて付記する。
6. 略称・略語については、初出の個所にその正式名称を丸括弧に入れて付記する。
7. 図表はそのまま版下として使用できるように、明瞭な原稿をデジタルデータで添付する。
8. 必要な文献を適切に引用する。引用文献などは、原則、本文末尾にまとめて記載する。ただし、章末ごとに分けて記載することもできる。また一部に脚注を併用することができる。さらに、注全般を脚注とすることができる。
引用に関わる本文中の箇所には、次のいずれかの指示を行なう。①関係箇所直後の右に引用上の通し番号（脚注の場合はページ内通し番号もしくは「*」印）を付す。他の方法として、②関係個所に直接 a) 著者名と出版年、または b) 出版年と著者名を「()」に入れて付記する。ただし著者名に代えてタイトルほかの事項を用いることができる。
9. 引用文献などは、以下の例に従って記述する。
「注」、「参考文献」、「引用文献」などの見出しを、文献群の冒頭に記す。引用文献は、上記 8. ①の場合、引用番号順に配列する。
同様に②の a) の場合は、著者名の 50 音順に配列する。b) の場合は、まず出版年を表記し、その下で年の降順に配列する。
10. 引用文献に加え、あるいはそれに代えて、注を記すことができる。注の文章上に読点「。」を用いることができる。なお、こうしたケースを含む場合は、文献群の見出しは〈注〉とすることが望ましい。

この規定については『図書館界』の規定を参考にした。実例に関しては『図書館界』の例を参考にすること。